

# 国際福祉研究に取り組む3つの方法論

－質問紙調査、インタビュー調査、フィールドワークを中心に－

日本の福祉は、どの道を進んでおり、どこに位置づけられるのか。福祉ニーズが複雑、かつ多様化されつつある今日、日本はどのような取り組みがとれるのか。なぜ、他所の国は、日本とは異なる福祉体系を持っており、そこから我が国に示唆できるものを見出すことはできないのか。このように、国際福祉研究に興味をもつ動機は様々ですが、国際福祉研究に取り組もうとする人々が必ず経験する悩みがあります。「国際福祉研究が持つ意義」と「方法論」です。国際福祉研究は、日本においてもつ意義は何なのか(日本を対象としない研究ほど、この悩みはさらに大きくなるでしょう)、採用しようとする研究方法は適切なのか、海外で調査する時に具体的にどのようなプロセスを踏めばよいのか、という悩みです。

第41回若手研究者・院生情報交換会では、留学経験がある同時に、国際福祉を専門とする先生と、実際に国際福祉研究に取り組んでおられる若手研究者をお招きして、その話しを語って頂きます。

- ▶ 日 時：2018年1月20日(土) 14:30-17:40 (無料)
- ▶ 場 所：同志社大学今出川キャンパス「良心館405」

14:30-14:40 <開会挨拶>

14:40-15:40 <基調講演> 高杉公人(聖カタリナ大学 准教授)

「国際福祉における比較研究の方法を考える

－エビデンスの捉え方を中心に－

・ワシントン州立大学 社会学学士 (B.A)  
・カルガリー大学 社会福祉学学士号 (B.S.W)  
・カルガリー大学 社会福祉学修士号 (M.S.W)  
・専門: 国際福祉、地域福祉

\*基調講演は40分、質疑応答は20分を予定しています。

近年、日本の社会福祉実践においてEBP(エビデンス・ベースド・プラクティス)の重要性が高まり、今まで以上に様々な調査方法(量的・質的調査)を用いて「エビデンス」を証明することが必要となっている。しかしながら、国際福祉の領域においては、エビデンスの証明が難しい場合がある。開発途上国での社会福祉実践の効果測定を行うにしても、識字率が低く話す言語も違う対象者に対して複雑な調査方法を用いることは不可能である。講演では、このような場合にどのような調査方法を用いて「エビデンス」を捉えるのかを紹介する。更に、近年に国際福祉の領域で行われている比較研究の実情と、その時に用いられている調査方法及び「エビデンス」の捉え方について紹介する。

15:40-15:55 <休 憩>

15:55-17:30 <報 告>

- ・「量的調査を用いた国際福祉比較研究の価値を語る」

孟 浚鎬 (同志社大学大学院社会学研究科 博士後期課程)

- ・「国際福祉研究におけるインタビュー調査－政策形成のダイナミズムにせまる－」

田中弘美 (同志社大学研究開発推進機構 特任助教)

- ・「国際福祉研究におけるフィールドワーク－言葉にあらわれない部分を捉える－」

茶谷智之 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科  
／日本学術振興会 特別研究員)

17:30-17:40 <総 括>

18:00～

<懇 親 会>

\*報告は各20分、質疑応答は35分を予定しています。

会費は、3000円(院生の方は1500円)程度

参加を希望される方は、懇親会の参加有無を含めて、下記までメールでお申し込みください。会場予約や資料作成等の準備の都合上、1月17日(水)までにご連絡頂けると幸いです。よろしくお願い致します。

参加申し込み・問い合わせ先:企画担当 同志社大学 姜(かん)民護 E-mail: [mkang@mail.doshisha.ac.jp](mailto:mkang@mail.doshisha.ac.jp)